

今月のみことば 2018年4月

「自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。」(マタイの福音書6章19～20節)

2008年、世界を震撼させたリーマン・ショックから早くも10年が経とうとしている。返せる見込みのない人々に住宅購入資金を貸し続け、案の定、巨額の焦げ付きを出したサブプライムローンがきっかけだった。途中までは巨万の利益を手にした投資家たちは、好況を信じ続けたが、期待空しく、ついにバブルは崩壊した。失われた資産は推定で4千兆円に上る、と言われる。日本の国家予算の約40倍である。また、太平洋戦争で日本が投入した費用とほぼ同じでもある。太平洋戦争は3年8か月続いたが、リーマン・ショックは一瞬の出来事であった。

ウォールストリートで豪腕をふるい、ベスト CEO に輝いたリーマン・ブラザーズのリチャード・ファルド氏は、一夜にして数えきれない人々の怨嗟を買うことになった。強気が災いしただけでなく、たった一人の判断が世界経済の不況の引き金となりうる危うさと恐ろしさは、言葉で言い表すことができない。

しかし、このようなバブルの崩壊は近年始まったことではないのだ。

1637年に、新興国オランダを襲ったチューリップ・バブルがそれである。オスマン帝国から持ち込まれたチューリップが高値で取引されるようになり、投機の対象となった。たった0.05グラムの稀少なチューリップの球根が、熟練労働者の10年分の年収に匹敵するまでになった。

一株が1億円、という具合である。勞せず大金を手にした人々は熱狂したが、ついに経済のバランスが崩れる時がやってきた。価格は一挙に99%下落し、路頭に迷う人々が続出したのである。

地上で得た富は、かくしてあつという間になくなる。またなくならないとしても、あの世まで持っていくことはできない。

滅亡への入口となりかねない欲望をうちに秘める私たちとイエス・キリストの生涯と比べてみると、コントラストは一層鮮やかである。

ご生誕の時、寝かされた飼葉桶は借り物であった。湖に浮かべた舟から大群衆に話をされたが、それはペテロの持ち舟であった。エルサレムには、借りたるばの子にまたがって入城され、最後の晩餐は借りた二階座敷で行われた。十字架刑の後、葬られた墓は、弟子であることをそれまで隠していたアリマタヤのヨセフのものであった。

しかし、そのご生涯は、二千年にわたって人類を養い、潤し続けている。何という豊かな生き方であろう。

それは、まさに天に宝を蓄える生き方の模範であった。「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」から始まる山上の説教は、すべて来るべき世に照準を合わせている。私たちも、日々の暮らしに追われるのではなく、まず天に目標を合わせて、今の生き方を見つめ直さなければならない。

そうでなければ、「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」(Iヨハネ2:16)で、あつという間に私たちの人生は終わってしまう。



一株3億円で取引されたセンペール・アウグスト